小学校における教科学習（道徳）
～自ら学ぶ力を育む授業づくり～
講師　岸本 知可 指導主事

～塾生のレポート集より～

本日の講義を受講し、道徳科の在り方について、再度見直すことができた。この講義の前、私は道徳科に対して授業をすることが難しいイメージをもっていた。大学で道徳科か保健体育科（自身の専科）のどちらの科目の模擬授業をしても大丈夫と言われた際、道徳科に挑戦しようと初めに思っていたものの、どのようにめあてを作ればよいのか、どのように授業を展開するべきであるのか、どのように発問すると、どのような答えが返ってくるのか、そういった疑問がたくさん自分の中に出てきてしまい、結局専科である保健体育科を選択してしまった。しかし、今、模擬授業を行うとなると、道徳科をしてみたいと思う。なぜなら、今回の講義でたくさんのことを学ぶことができたからだ。道徳科は先生が教えるものではなく、子どもたちが自己を見直す場であるということを知り、自分の中にあった道徳科の授業を行うことへの恐怖心のようなものがなくなったような気がした。子どもたちは、同じ家庭で育っているわけではなく、多種多様な考え方をもっている。その中で、一つの発問に対して、私が思っている、または期待している答えが出なかった場合どうしたらよいのだろうと思っていたが、岸本先生が、焦らず他の子どもたちの意見も聞いて、その子の意見を否定せず、その子が自分と違う意見をどのようにとらえているかを理解した上で、最終的に授業の着地点が同じになればよいとおっしゃっていて、すごく勉強になった。そして、道徳科の授業を行うにあたって大切にしなければならないことについても理解を深めることができた。今までの講義でもあったように、「めあてを大切にする」ことがその一つとして挙げられる。子どもたちがイメージしやすいめあてを立てることで、自分自身の生活とつなげやすくし、また、自分事としてとらえやすいようにすることが先生の役割だと再確認することができた。そうするために、授業のめあてをいくつか考えた上で、その中から学級に合ためあてを選ぶとおっしゃっていたので、私も同じように、道徳科以外の授業でも実践しようと思った。最後に、いつもは発表するのが苦手で質問ができなかったが、今回は今年初めの講義だったので分散会で質問することができ、挑戦してみることの大切さも学ぶことができた。

～レポート担当スタッフのコメントより～

道徳に対する「難しい」イメージが払拭され、それ以上に「授業をしてみたい」というプラス思考に導いてくれた今日の講義は、宝物発見!!のような価値がありましたね。質問に対する岸本指導主事からの答えでは「焦らず～」のような具体的な方向性を示していただき、子ども達の多様な考えを受け止めて１つの内容項目に着地できればよいことがわかり安心できたと思います。「めあて」を大切にするのはどの授業でも同じです。道徳科では特に「自分事」として捉えやすい「めあて」を設定したいです。道徳性や態度はすぐに身に付くとは限りません。授業を繰り返し、日常の経験と相まって磨かれていきます。それを踏まえて１時間を大切にしたいですね。さて今回、分散会で初めて質問ができたこと、素晴らしいです！新年の良いスタートになりましたね！！今年も頑張りましょう。

生きる力を育む道徳教育
～自らを律する力を育む授業づくり～
講師　木下 要子　指導主事

今回の講義、模擬授業を受けて、道徳は自分の生き方を見つけるものなのだなと学んだ。今回の教材のように主人公に焦点を当てて、自分の生き方と照らし合わせて考えられるのがとても良いだろうなと思った。特に、中学生は自分に視点を置きすぎると嫌になるから、教材の登場人物から生き方なり、考え方、道徳性というものを考え、気づかせるようにすると良い授業になるということを学んだ。道徳の教材はあくまで、道徳的価値について考えための「きっかけ」で、でもこのきっかけづくりが道徳の授業にはとても重要なものなのだということがわかった。また、“道徳的価値の大切さを気づかせる”の部分が「教える」ではないことが大事だということを学んだ。教師の立場になると「教えたり、わからせたり」したくなるのかもしれないが、道徳では、子どもの内側にある心だったり、良心だったり、内面的な部分を大切にしていて、サポートする、引き出すのが道徳を教える上で大切なのだと学んだ。

今回の模擬授業では、主人公の気持ちなどに寄り添って考えたけれど、おばあさんの立場になって考えるともっと多角的で広い視野をもつことのできる授業になるとおっしゃっていたので、道徳の授業をする上で視点を増やすことで、おもしろい授業がつくれるのだろうなと思った。また、授業内での基本発問と中心発問では少し役割が違うのだなと感じた。基本発問では、中心発問までにある程度土俵に乗せなければならないので、揺さぶりをかけたり、１対１の形でたくさんコミュニケーションをとったりして、授業を展開させていく必要があるのだなと思った。逆に中心発問は、最低でも予想される生徒の反応を 10 個以上考えられるようにしないとそれは良い中心発問とは言えないとおっしゃっていたので、たくさんの答えが出せるような発問を考えられる授業にしたいなと思った。また、道徳の好き、嫌いの生徒よりも、無関心な生徒をどれだけ土俵に乗せられるかという話をしているときに、授業内だけでなく、実践の場とか他の場も大事で、道徳は授業以外の実生活の中でも養っていけるような教育にしないといけないのだなと学んだ。

卒業すれば、生徒は義務教育を終えて新たな社会へ踏みだします。様々な環境の下で生きてきたどの子も、よりよく生きていくために、２２の内容項目について、道徳性を養い自己を見つめてほしいです。授業においては、登場人物を通すことで、より素直に深く考え、自分に向き合い見つめやすくなり、「納得」と「発見」にたどり着くでしょう。どの授業もめあてと中心発問は大切ですが、学級の実態や個々の生徒をしっかり見据えたうえでの設定が必要となってくる道徳では、さらに大事でしょう。“教師の人間味ある指導の下でこそ”生徒が充実感をもって語り合い、考え、議論することができると、講義のしめくくりで言われていました。人間味のある共に考える先生、めざしたいです。

分散会の様子

1/7 小学校

1/10 小学校（補講）

1/7 中学校

1/10 中学校（補講）

子どもたちの今と未来のため、社会のあらゆる場で「子どもを共に育む京都市民憲章」を実践しましょう！
京都はぐくみ憲章